

## 医師としてのキーツ

岡 田 章 子

キーツが医師としての訓練、教育を受けたことはよく知られているが、詩の中に題材として直接この知識や体験がほとんど扱われていないためか、今まで必ずしも十分な注意が払われていなかった。しかしながら彼の短い生涯の中での6年間、医療に従事したことは無視できないことであり、詩人としてキーツに何かの影響を与えていると思われる。彼がどうして医学の道を選んだのか、その訓練がどのようなものであったのか、どうしてやめたのか、医学が彼の人間性の中に占める位置はどんなものかを考えることは人間キーツを理解するために欠かせないことである。Sidney Colvin, Amy Lowell, Aileen Ward, W. J. Bate, Dorothy Hewlett, Robert Gittings 等、今世紀の代表的なキーツ研究者の書いた伝記はいずれもこの問題を取り上げているが、医師としてのキーツに焦点を絞ったものは医師の手によるもので、キーツが研修したガイズ病院の医師 Hale-White による *Keats as Doctor and Patient* (1938) と医師の読者を念頭においた Walter A. Wells 著 *A Doctor's Life of John Keats* (1959) の2冊がある。Hale-White の著書はキーツがガイズ病院の一員であったことを誇りとして書いており、20世紀半ばになってからもガイズ病院の病棟の一つがキーツ病棟と名付けられている程であるが、内容に関しては幾分間違いもあるようだ。最近になって文学研究者の立場からキーツの医師としての側面が論じられるようになり、その代表的なものが Donald C. Goellnicht : *The Poet-Physician : Keats and Medical Science* (1984) および Hermione de Almeida : *Romantic Medicine and*

*John Keats* (1991) である。これらはキーツにとって医学が従来の伝記のように若い時の一時期の体験として見るのではなく、生物、化学、解剖など広く医学に関連した分野がキーツの人間性に関わっていることを深く洞察している。キーツは一般に考えられているよりも熱心に医学を学び、彼の生涯に根付いているのである。本稿ではキーツの医師としての生活を伝記的事実を中心に検討し、彼の詩作といかに関わるかという、より深い研究の基礎としたいと思う。

キーツが医学に携わったのは1810年夏から1816年夏までの6年間で、これは彼の短い人生のうち詩作に携わった年数と同じ長さである。初めの5年は薬剤師のトマス・ハモンド (Thomas Hammond) のもとで見習いをし、後の1年はガイズ病院で外科医のもとで実習をしている。どうして彼が医学の道に進むことになったのかははっきりしない。手紙の中にもこのことに関する明言は見あたらない。評論家達は伝記の中で様々な推測をしている。ひとつは彼の両親の死後、後見人に定められたリチャード・アベイ (Richard Abbey) に意志に反して医学の道に進むことを強制されたという見方がある。これに対し Hale-White は無理強いとは考えられず、キーツは自ら進んで選んだのであり、異存のあった形跡はないと述べている (p. 8)。本来キーツに医学が不向きであったという見方はプレラファエリト派の人々のキーツは繊細すぎる精神の持主だったという固定観念によるもので、事実に基づくものではない。彼らはキーツは弱々しい性格だという感情的な見方に捉われていたのである。性格の面からキーツがこの道に向いていたかどうかははっきりした記述がない。弟ジョージ (George) は、神経質で病的だとしているが、Ward はキーツは結核に侵されたりしているが、精神的には若い時からずっと健康的だったと言っている。<sup>1)</sup> Ward はキーツは理想主義者で何か世間のためになることをしたいと思っていた上、この頃結核による母の死も医学を選ばせるきっかけになったとみている。しかしながら Ward は本当に何が医学を選択させたのかは謎だが、15歳の時の彼の可能性としてはよい選択だったと言っている。Hewlett はキーツのような性格の人が嫌な

ものに従うとは考えられないと主張している一人で、もっと間接的な理由を見出している。キーツの父は Swan and Hoop といううまやを営んでいた馬丁で、その近くに町の医師達の馬をつなぐ広場があり、彼らの姿を見て医師になろうという気持ちを抱いたのかも知れないと考えている。<sup>2)</sup> キーツの伝記の中で医学の占める割合を重視している Gittings はクラーク (Cowden Clark) の忠告を受け入れてキーツ自身が決定したのだろうと考え、これに母の死も影響していたのだろうと述べている。Gittings は更にこの頃彼の読んでいた本は文学的なものよりもむしろ植物や鉱物の本が多かったことを指摘し、本来キーツは医学を選ぶ素質を持っていたという見方をしている。<sup>3)</sup> De Almeida はもっと積極的にキーツは詩人になってからも医学書を手元に置き、開業する考えもあったのだろうと推定し、キーツは自らすすんでこの道を選んだのだろうと考えている (p. 22)。かくて、かなり無理に医学に進んだという見方から、自ら志したという見方まで様々であるが、多くの評論家が当時の中流階級の少年としては適当な進路としてアベイのすすめを受け入れて決めたのだろうとしている。

ここで当時の医療制度について簡単に述べる必要がある。キーツの頃医学は変革の過渡期であったが、何世紀もの間、医師は薬剤師 (apothecary)、外科医 (surgeon)、正規医師 (physician) の3段階に分かれていた。正規医師はオックスフォード、ケンブリッジ、エディンバラの医学部を卒業した人で、勉学年数も長く、金持ちの子弟しか進学できなかった。また彼らだけが「ドクター」の称号を与えられ、高額の治療費を請求した。そのため金持ちのみがこの最上級の医師にかかることが出来た。一方外科医は理髪師と一緒にギルドを組織していたが、1745年に分離し、外科医のみで自分達の職業基準を定めた。さらにすすんで1800年には王立外科医学校 (Royal College of Surgeon) を設立し、外科医として開業する志願者に資格試験を課すようになっていた。薬剤師には免許証は不要であった。従って徒弟期間 (7年を要したがキーツの頃に5年に減じられたらしい) が終わると、そのまま薬剤師になるか、外科医になるための資格試験を受けるかのいずれかで

あった。それが1815年7月に新しく薬剤師法（Apothecary Act）が出来て、5年間の徒弟制度の終了後半年の病院実習を必要とするようになった。この実習は "Walking the Hospitals" と呼ばれた。キーツにとって正規の医師を目指すのは費用もかかり無理であったので、手の届く範囲にあり、生計も立て易く、市民からある程度の尊敬も得られる外科医になろうとした。実際人々の大半は薬剤師と外科医の医療を受けていたのである。Ward (p. 23) によれば、ヴィクトリア朝初期の統計では英国内で正規医師が300人以下だったのに対して外科医は8000人であったという。

以上のような医療制度の下で、キーツはエンフィールド校を出ると医学の道を歩む決心をして、1810年夏エドモントンのハモンドというかなり名声のある薬剤師兼外科医の許に徒弟に入った。期間について Hale-White は理由は不明だが、キーツの場合通常より1年縮められて4年だった (p. 10) と記述しているが間違いで、やはり5年間というのが本当のようだ。この徒弟生活がどんなものであったか、あまり何も書かれていない。キーツ自身も徒弟時代のことを話したがらず、1819年の手紙の中で一言触れている以外はどこにも言及していない。それはハモンドと1年暮らした頃の喧嘩に触れた一言である。

Our bodies every seven years are completely fresh-materiald —  
seven years ago it was not this hand that clench'd itself against  
Hammond.<sup>4)</sup>

キーツが1813年の終わりか1814年の初め頃、喧嘩してハモンドと共に暮らすのをやめた事実を Gittings (p. 38) が指摘しているが、この記述だけではこの頃の詳しいことは判らない。断片的に記述されていることを総合すると、この頃の生活は概ね次のようなものになる。キーツは食費、住居費も含めて謝礼金を1年に210ポンド払った。普通は40ポンドだったから、これはかなりの額である。それと共に、主人に対して徒弟期間中は結婚しないこ

と、賭事をしないこと、居酒屋へ行かぬことなどを誓った。これらは主人に対する伝統的な誓いであった。ハモンドはガイズ病院でも学んだ羽振りのよい医師で、キーツを含めて2人の徒弟を持っていた。キーツはハモンドの下で使い走り、掃除、会計、薬の調合等の雑用をしながら、診療を見学して、抜歯、骨接ぎ、しゃ血、出産などを学んだようだ。この期間中のキーツの日常についてはあまり知られていないが、仕事の空いた日はエンフィールド校へ歩いて行って、カウデン・クラークに詩の手ほどきを受けたのだろう。彼がこの時期のキーツについて言及している。

When he left Enfield at fourteen years of age, he was apprenticed to Mr. Thomas Hammond, a medical man residing in Church Street, Edmonton....This arrangement evidently gave him satisfaction, and I fear that it was the most placid period of his painful life.<sup>5)</sup>

クラークはキーツが仕事に満足し、余暇は詩に親しんで、充実した時期を過ごしたと思っている。Ward (p. 25) もこの頃クラークによって本の世界を開かれ、スペンサーとの出会いがあったと述べている。Colvin はキーツの徒弟仲間が彼のことを「怠け者でほつき歩き、いつも詩を書いている奴」と評した言葉を引用している。<sup>6)</sup> これらのことからキーツは医学の修業のかたわら、詩作への関心を深めていったことがうかがえるが、医学生としてのどの位優秀であったかはわからない。キーツの医学的側面を重視する最近の研究者 De Almeida (p. 22) は「意欲のある医学生」と認めている。Goellnicht (p. 36) もキーツが医学生として積極的だったと見ている一人で、徒弟期間の終わろうとする頃、エドモントンで開業することを考え始めたのではないかと推測している。しかしキーツの個人的事情に変化が起こった。ちょうどその頃、祖母の死により妹がアベイと暮らすことになり、キーツ自身は弟トム (Tom) と暮らし、もう一人の弟ジョージはロンドンにいたので、もは

やエドモントンに居住する必要がなかった。ちょうど 1815 年 7 月に薬剤法も制定され、ハモンドの勧めを受けて、同年 10 月 1 日にガイズ病院に研修生として 12 カ月の研修コースに登録している。当時薬剤師の免許を得るのには 6 カ月間の病院実習で十分だったのだから、キーツはより上級の医師を目指したことがうかがえる。ガイズ病院は当時英国内で唯一の系統だった医学教育の出来る病院であった。

この研修について、Gittings (p. 48) はキーツはおそらく一般に知られている以上に強い推薦を受けてガイズ病院へ入ったのではないかと推測している。当時 Thompson Forster, William Lucas, Jr と Astley Cooper の 3 人の医師がこの病院にいたが、上級の解剖学を講義する著名なクーパーがただちにキーツを自分の下の見習いにつけているからである。彼は同じ頃自分の甥を入れているが、これはそれ以上の処遇である。この甥と同じ下宿におき、居間も共有させる程であった。また実習開始後 1 カ月足らずの 10 月 29 日に外科助手 ("dresser") に採用しているのである (Hewlett, p. 38)。なぜこんなに早く助手になっているかは不明だが、上司のクーパーが彼に好意的だったからだと言われている。病院の実習生の中では助手は恵まれた立場で、そのために特別謝金を払った。翌年 3 月にはさらに上級の手術助手となった。Hale-White (p. 12) によれば、ガイズ病院の医学部にキーツの名の入った記録が次のように残っている。

October 1 1815. John Keats (No. 57) 6 months. Place of Education,  
Mr. T. Hammond, Edmonton. Office fee £ 1. 2 S  
1816, March 3rd, John Keats under Mr. Lucas. Time 12 months,  
from Edmonton, £ 1. 1 S

この頃ガイズ病院にいた上記の 3 人の医師のうちで、最初の一人はめったに手術をしないが、端正な老紳士であった。この 3 人がそれぞれ 4 人の助手を持ち、病院中で助手は 12 人しかいなかったのも、手術助手は大変な名誉と

考えられた。キーツの指導者クーパーは尊敬される人物で、「知識は観察と経験によってのみ得られるものである」と信じ、これはキーツの心に末永く留まったと言われる。この病院での彼の医者としての生活は Gittings (p. 63) が詳細に描いている。週2回の病棟勤務があり、常に持ち歩いている道具箱が仕事のシンボルであった。その中には傷の処置に必要な材料が入っていて、それを持って院内をまわることは助手の誇りであった。手術室での見学の場合も単なる実習生の場合は後ろの席に群がっているが、助手になると前の方のよい席を占めることが出来た。彼らは大手術以外は何でもこなし、かなりのことに関して判断を任されていた。勤務は忙しく、日常的な小手術や抜歯は午後2時から3時頃までかかったらしい。当直もあり、一週間も続けて寝食の費用を自前で払って宿泊することもあった。救急処置はしばしば不潔であったし、大手術はもっと悲惨で、患者の苦痛やうめきにおびえ、また指導医の技術の不足に失望することもあった。キーツはクーパーの後、1816年3月以降ウィリアム・ルカスの下で助手を務めることになったが、彼の人格は粗末でキーツを失望させた。ルカスは父の名のために外科医の地位に昇ったが、実力はなかった。彼の様子は次のように記されている。

A tall, ungainly, awkward man, with stooping shoulders and shuffling walk, as deaf as a post, not overburdened with brains of any kind, but very good natured, and easy, and liked by everyone. His surgical acquirements were very small, his operations generally very badly performed, and accompanied by much bungling, if not worse. He was a poor anatomist and not a very good diagnoser, which now and then led him into ugly scrapes.<sup>7)</sup>

またクーパーはルカスの非情性について、次のように述べている。

He was neat-handed, but rash in the extreme, cutting amongst

most important parts as though they were only skin, and making us all shudder from the apprehension of his opening arteries or committing some other error.<sup>8)</sup>

Goellnicht (p. 40) はキーツが医学を見限った一因はこのルカスにあると見ている。彼はこの残酷で能力の劣るルカスの助手でなく、クーパーの助手に任命されていたならば、医学を続け、この道で成功しただろうとまで考えている。ルカスには失望したが、それでもキーツは毎週尊敬するクーパーの手術を見学し、彼のよき臨床を学び続けていたらしい。

臨床実習以外にキーツは幾つもの講義に出席していた。1826 年のガイズ病院の講義や実習のスケジュール表が残っていて、キーツの頃のものともあまり相違はないものと思われる。それによると概ね次のようになっている。<sup>9)</sup>

7 : 30 a. m.	産婆学講義
10 : 00 a. m. (月水金)	実地医療
11 : 00 a. m.	病院実習 ガイズ病院とセント・トマス病院は通りをひとつ隔てて隣合い、当時医学教育のために連合していた。実習はガイズ病院が月水金、セント・トマス病院が火木土で交互に行われ、前者は水曜が入退院の日であり、後者は木曜が入退院の日で、とくに忙しかった。
2 : 00- 4 : 00 p. m.	解剖講義
4 : 00 p. m.	解剖実習
7 : 00 p. m. (火金)	医学理論
8 : 00 p. m. (火金)	外科理論と実習

他に月・水曜には夜 6 時半から生理学講義があり、そのスケジュールはかなり過密なものであることが判る。当時講義の授業料は 1 クラス分ずつ払っていたようだ。合計で 33 ポンド 13 シリング払ったと記録されている。<sup>10)</sup> これ

らの講義のうち、クラークの言うところによれば、キーツの嫌いだったのは解剖学だけであった。解剖を嫌ったのは、恐ろしき解剖室の雰囲気であったらしい。Goellnicht (p. 41) はキーツはこの解剖を嫌うあまり、本来の外科医の試験を受けずに、薬剤師協会の免許の試験を受けたのだという見方をしている。その試験には解剖は含まれていなかったからである。さらにおぞましきことは当時の解剖用遺体の入手経路である。これについては Hale-White (p. 14) が詳しく叙述している。夜、墓から泥棒が遺体を盗んで夜明けまでに解剖室に運び込んだのである。死体発掘者はいつも注意深く、きょうかたびらや埋葬品は棺の中に残した。なぜなら附属品をとると犯罪になるが、遺体泥棒だけなら単に不品行というだけですむからである。遺体運搬人は悪賢い悪党で、人々から嫌われた。この方法で遺体を入手することは 1832 年解剖法 (Anatomy Act) で廃止された。Gittings (p. 72) はこの受験に関して詳細を述べている。キーツは見習い、病院実習、講義等の最低条件をすべて満たし、その上ハモンドの満足すべき証言を得て、1816 年 7 月 25 日に受験できるようになった。テストは 4 科目で、薬局方の翻訳、医師の処方箋、医学理論と実践、薬化学および薬物学であった。このとき、188 人の志願者があったが 10 人は資格不十分で受験できず、11 人は不合格となった。キーツは合格し、同年 12 月には *London Medical Repository* に正規の薬剤師として登録されている。

このようにキーツは着実に医学の道を歩んだにもかかわらず、時折キーツが講義の最中にふざけた詩を書いていたらしいことや、ノートの端に花のスケッチが落書されたりしているために、キーツの医学の能力を軽視し、この合格にすら疑いをかける人もある。その一人が学生時代キーツと同宿していたヘンリー・ステファンで、彼はキーツが詩には情熱を示したが医学にはそれほど興味を示さなかったと述べており (Hewlett, p. 40) しかもその彼が同じ試験を 2-3 週間後に受けて不合格だったので、キーツの合格は真に医学知識によるものではなく、ラテン語の成績でパスしたのだと述べたことによるものである。もう一人はキーツと同時代のジョン・フリント・サウス

(John Flint South) が *Memorials* においてキーツの合格は単に名目上のことだと言っているのに基づく。いずれも受験科目の点でつじつまが合わない上根拠も不確かで信頼性に欠ける。実際はこれらの医学教育は彼にとって有益で、正当に試験に合格しているのである。

こうして試験に合格した後も、暫く講義に出たりしているが、その約1年後1817年春には医学を諦めている。ここまで来て資格を得た職業をやめるには相当の理由がありそうに思われるが、何故諦めたのかについてキーツ自身は明らかにしていない。評論家達も様々な推測をしているが、どれも決定的なものはない。キーツの友人や身辺の人々の思い出話の中に気性に合わなかったらしいことが散見される。クラークがキーツに医学についての見通しを尋ねたところ、次のように答えたことが記されている。

The other day, during the lecture, there came a sunbeam into the room, and with it a whole troop of creatures floating in the ray; and I was off with them to Oberon and fairy-land. <sup>11)</sup>

キーツは講義の最中にもふと心を妖精の国へと馳せたというのである。また別の友達には次のように告げている。

My last operation— was the opening of a man's temporal artery. I did it with the utmost nicety, but reflecting on what passed through my mind at the time, my dexterity seemed a miracle, and I never took up the lancet again. <sup>12)</sup>

上の記述以前に友人ブラウンも1817年5月以前に性に合わないので、開業するのをやめようとしていたらしいと記している。<sup>13)</sup> また1818年6月末、弟ジョージ夫妻が渡米する際リヴァプールに見送る途中、このガイズ病院での仲間のステファンを訪ねている。彼は小さな町で外科医として開業してい

たのである。この旧友との再会の折キーツは決定的に医業を諦めて詩作に専念すると述べたらしい。<sup>14)</sup> Hale-White もキーツの繊細な神経では当時の病院の状態が耐えられなかったと見ている一人であるが、最近の批評家の中には Gittings (p. 50) のように、キーツは少年の頃から幾分グロテスクなものを好む傾向があり、医療器具などを揃えるのは性格に合っていたと見る人もある。Goellnicht (p. 41) も当時の病院の悲惨さは他の医学生にとっても同じで、6年間も続けた仕事をやめる理由にならないと述べ、それよりもキーツが1816年10月頃までに Hunt, Haydon, Hazlitt らに会い、詩の世界に惹かれていったと推測している。おそらくどうしても合わないからやめたというよりは、医学修業のかたわら、すこしずつ詩作のほうに傾いたと言えるのではないか。キーツ自身は明確に医学を諦めた事情を説明していないが、手紙の中で医学と詩作の問題に触れているものが幾つかある。1818年5月3日のレノルズ宛の手紙にも医学を学んだことは全く後悔せず、自分の詩への愛着を妨げるものではないと記している。

Were I to study physic or rather Medicine again, — I feel it would not make the least difference in my Poetry ;... Every department of knowledge we see excellent and calculated towards a great whole. I am so convinced of this, that I am glad at not having given away my medical Books, which I shall again look over to keep alive the little I know thitherwards ; and moreover, intend through you and Rice to become a sort of Pip-civilian. An extensive knowledge is needful to thinking people — it takes away the heat and fever ; and helps, by widening speculation, to ease the Burden of the Mystery. (Letters 1 : 276-77)

詩は医学よりも魅力的であったけれど、時にはキーツの心は揺れ動き、どちらをとろうかと迷うこともあったようだ。ちょうど1818年後半キーツの

詩は批評家から酷評を受け、金銭の苦勞もあって、困難な頃であった。1819年3月3日ジョージ夫妻にやはり医学を続けようかという気持ちを書き送っている。

I have been at different times turning it in my head whether I should go to Edinburgh & study for a physician ; I am afraid I should not take kindly to it, I am sure I could not take fees — & yet I should like to do so ; it is not worse than writing poems, & hanging them up to be flyblown on the Reviewshambles.

(*Letters* 2 : 70)

エディンバラへ行って更に上級の医師になる研究を続けて酷評に報いようという気持ちもあったようだ。しかし、あまりよい医師にはなれない、診察料を受け取る気分になれないと思っていた。人の苦しみを救ったということが、金銭に換算されるのが耐えられないという気持ちになったのだろう。出来れば詩作のほうがよいという気持ちは常にあったらしい。それでもサラ・ジェフレー (Sarah Jeffrey) 宛の手紙 (1819年5月31日付) で船医になろうかという迷いを漏らしている。

I have the choice as it were of two Poisons (yet I ought not to call this a Poison) the one is voyaging to and from India for a few years ; the other is leading a feverous life alone with Poetry— This latter will suit me best.

(*Letters* 2 : 112-13)

それに対してジェフレーは船医になることを勧めたらしく、次の手紙 (1819年6月9日付 2 : 114-15) でキーツはそれに対しても気持ちは揺れ動き、賛意を表したり、拒否したりしている。またこの頃ディルケに宛ても (1819

年6月)自分の将来には3つの選択があり、そのひとつが外科医になることであり、これが自分の運命となるであろうが、2、3日の内に決めると書き送っている。結局1819年6月9日、妹のファニー宛の手紙ではっきりと船医になるのはやめることを表している。

... I am in so unsettled a state of mind about what I am to do — I have given up the idea of the Indiaman ; I cannot resolve to give up my favorite studies : so I purpose to retire into the Country and set my Mind at work once more.

(*Letters* 2 : 117)

田園に落ち着いて好きな詩作にうちこめたらと願いながら、それにもかかわらず、1820年6月21日頃のチャールズ・ブラウン宛の手紙では、本が出ることと関連して、もしうまく行かないようなら、再び医師の道に戻ることも考えようという意図を示している。

My book is coming out with very low hopes, though not spirits on my part. This shall be my last trial ; not succeeding, I shall try what I can do in the Apothecary line.

(*Letters* 2 : 298)

ここで「自分の本」と言っているのは *Lamia, Isabella, The eve of Saint Agnes, and other poems* のことで、それまでの幾つかの厳しい批評のこともあって、キーツはあまり楽観していない。やはり詩作がうまく行かない時は生計を立てる道としては医学の方がやりやすいという気持ちがあったのだろう。

これらの手紙から、普通考えられているよりもキーツの心に医師になるという考えは長く留まっていたようだ。彼にとって医学の才能が欠けていたと

いうわけではなく、また何か具体的な理由に基づいてきっぱりと医学と決別しようとしていたのでもなく、詩作の方に心が傾きながら自信がなくて迷うこともあったのだろう。自分に対して確かな回答を出す暇もなく、結核が悪化したため、医師の勧めに従って寒くて陰鬱なイギリスを逃れてイタリアに向かうことになる。1820年9月17日に友人セバンに伴われ、ロンドンからマライア・クロウザー号に乗船した。船客は4人で、他にピジョン夫人とコレットルが一緒であった。後者はキーツと同様に結核を患っていたらしい。この女性客の船酔いや気分の悪さに対して、キーツは職業的な適格さで、治療したとされている。

キーツが繊細で、神経質で、全く医学に向かないと見る極端な意見から、Gittings のように非常に優れた技量を持っていたと評価する人まで様々であるが、恐らく人並みの能力を持って医療に臨み、それ以上の情熱を持って詩作をしようとしたのだろう。彼は短い生涯で、医学にしても詩にしてもまだ確固たる自信を得るには至っていないが、基本的にはやはり詩の方が性格に合っていたのだろう。キーツにとって6年間の医師としての生活は何を与えたのだろうか。何よりも人々の現実の苦しみを日常的に見、その中で尊敬できる医師、非情な医師と様々な場面の織りなす人間模様を見ることが出来たのが貴重な体験であった。医学の世界は他のどの職業よりも鮮やかに人間の喜びや苦しみを示したのだろう。キーツは詩の題材を医学の世界に求めてはいないが、彼の基本的概念である人の苦しみを救うのが詩人の役目であるという考えは彼の体験に基づくものである。*The Fall of Hyperion* の中で、詩人とは「賢人であり、ヒューマニストであり、人類の医者である」と詠ったのはこのことを最も端的に示したものである。

Sure a poet is a sage ;

A humanist, physician to all men.<sup>15)</sup>

注

- 1) Aileen Ward, *John Keats : The Making of a Poet* (New York : The Viking Press, 1963), p. 25.
- 2) Dorothy Hewlett, *A Life of John Keats* (London : Hutchinson, 1970 [1937]), p. 31.
- 3) Robert Gittings, *John Keats* (London : Heinemann, 1980 [1968]), p. 34.
- 4) Hyder E. Rollins, ed. *The Letters of John Keats, 1814-1821* (Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1958). 2 vols. To George Keats, 21 September 1819. 2 : 208.
- 5) Goellnicht, p. 14. に引用されている。
- 6) Sidney Colvin, *John Keats : His Life and Poetry, His Friends, Critics and After-fame* (London : Macmillan, 1917), p. 17.
- 7) Goellnicht, p. 40 に引用されている。John Flint South, *Memorials of John Flint South*, ed. C. L. Feltoe, (Fontwell : Centaur, 1970), p. 52.
- 8) Gittings, *John Keats*, p. 64 に引用されている。Feltoe, *Memorials of John Flint South*, p. 52.
- 9) Goellnicht, p. 34 による。
- 10) Gittings, p. 83 の資料による。
- 11) Welter A. Wells, *A Doctor's Life of John Keats* (New York : Vantage, 1959), p. 79 に引用されている。
- 12) Colvin, p. 29 に引用されている。Charles A. Brown, *A Life of John Keats* (London : Oxford UP, 1937), p. 43.
- 13) Hale-White, p. 37.
- 14) Richard Monckton Milnes, ed., *Life, Letters, and Literary Remains of John Keats* (London : Edward Moxon, 1848).
- 15) H. W. Garrod, ed. *Keats : Poetical Works* (London : Oxford UP, 1973), *The Fall of Hyperion*, 1. 189-90.

書 誌

- Bate, W. J. *John Keats*. London : Chatto & Windus, 1979.
- Brown, Charles. *A Life of John Keats*. London : Oxford UP, 1936.
- Colvin, Sydney. *John Keats : His Life and Poetry, His Friends, Critics and After-fame*. London : Macmillan, 1917.
- De Almeida, Hermione. *Romantic Medicine and John Keats*. Oxford : Oxford UP, 1991.

- Gittings, Robert. *John Keats*. 1968 ; rpt. London : Heinemann, 1980.
- Goellnicht, Donald C. *The Poet-Physician : Keats and Medical Science*.  
Pittsburgh : University of Pittsburgh Press, 1984.
- Hale-White, Sir William. *Keats as Doctor and Patient*. Oxford : Oxford UP,  
1938.
- Hewlett, Dorothy. *A Life of John Keats*. 1938; rpt. London : Hutchinson,  
1970.
- Keats, John. *Keats : Poetical Works*. Ed. H. W. Garrod. London : Oxford  
UP, 1973.
- \_\_\_\_\_. *The Letters of John Keats, 1814-1821*. Ed. Hyder E. Rollins.  
Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1958. 2 vols.
- Lowell, Amy. *John Keats*. 2 vols. 1925; rpt. New York : Archon Books,  
1969.
- Milnes, Richard Mockton (ed). *Life, Letters, and Literary Remains of  
John Keats*. London : Edward Moxon, 1848.
- South, John Flint. *Memorials of John Flint South*. Ed. C. L. Feltoe. Font-  
well : Centaur, 1970.
- Ward, Aileen. *John Keats : The Making of a Poet*. New York : The Viking  
Press, 1963.
- Wells, Walter A. *A Doctor's Life of John Keats*. New York : Vantage, 1959.